
麒麟のゆびわ。

柊リンゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリンのゆびわ。

【Nコード】

N9062A

【作者名】

柊リンゴ

【あらすじ】

ほかのひととの結婚が決まったけれど、大好きなサクラへの想いを捨てきれない紅葉。「彼女」になれなかったけれど、大好きでした。玩具の指輪をくれたときの笑顔が忘れられて、サクラに招待状が出せません。紅葉がサクラとの思い出を振り返りながら進むお話です。恋愛ものです。

1話・捨てられた指輪と捨てられない想い。(前書き)

友情じゃない。確かに恋愛をしていたくせに。

1話・捨てられた指輪と捨てられない想い。

麒麟のゆびわ。 1

「お母さん 私の指輪を見なかった？」

焦りを隠せない表情で、紅葉が駆け寄ります。

「指輪って？」

のんきそうなお母さん。

娘のいるほうを洗濯物を抱えたまま振りかえります。

「麒麟の・・・指輪。」

「あら。玩具かと思って捨てちゃったわよ。」

「え・・・。」

「あの指輪。サクラから貰ったもののなの。」

紅葉の瞳から涙が零れます。

「サクラくん・・・。」

お母さんは洗濯物を床に落としてしまいました。

娘の、サクラくんへの思いを知らないはずがありませんでした。
もう6年になる恋。

片思いなのか、両思いだったのか。もう今となっては。

「そう、サクラくんがくれたの。」

あの子らしいわね・・・少年のようね。

でも紅葉、あんたはほかのひとと結婚が決まったのよ。

もう・・・サクラくんのこととは忘れてしまいなさいな。

結婚式の招待状も送ったんでしょう？」

「まだ。」

「どうして？いい加減になさい。」

あの方にも迷惑でしょう？

あんたがサクラくんを好きなのはわかってるけどね・・・。」

お母さんもやりきれない思いを抱えていました。

「お母さん。サクラくん好きだよ？

でも、あんたが決めたんだし。」

「どうしてこんなことに。」

紅葉は失くした指輪と、

手を離さなきゃいけない想いに悔やんでいました。

1話・捨てられた指輪と捨てられない想い。（後書き）

相手を大事にしすぎてしまう。そんな恋を書いてみたいのです。

2話・メロンパンの零れる仕草（前書き）

出会ったころは高校生でした。

2話・メロンパンの零れる仕草

「コーヨーって読むの？」

モデルみたいに綺麗な顔をしてるのに。

馬鹿っぽいサクラの聞き方に、

思わず笑ってしまった出会いは6年前でした。

まだサクラも紅葉も高校生だった頃です。

紅葉が体調を崩してしまい、

学校に遅刻して行こうとした朝の10時すぎ。

JRの駅前のパン屋さんの前で「あ。吉野さんだ。」

声をかけられて顔を見ました。

肩まで伸ばしたレイヤーの髪は、二重の大きな瞳と同じ茶色。

「あれ・・・桜井くん？」

紅葉は155CM。サクラはその頃165CM。

すこし見上げて気がつきました。

「これだけ背が違うんだ、こんなに近くで話したことも見たこともなかったから。」

同じクラスの桜井恭輔くん。

男の子なのに目立つ。

雰囲気には華がある・・・。

いつも沢山のひとに囲まれて楽しそうに騒いでいる子です。

おとなしい紅葉はお話したことはありませんでした。

「どうしたの吉野さん。遅刻？一緒じゃん。」

「あ、うん。」

「顔色悪いよ。朝ごはん食べた？」

「食べてないけど・・・。」

「半分なら食べれる？」

メロンパンを半分割って、「はい。」渡してくれたのです。

「ね。吉野さんてさあ。下の名前なんて読むの。コーヨーでいいの？」

「・・・もみじ。」

「あ。そうなんだ！俺、ずっとコーヨーだと思ってた！！

じゃあ、もみじって呼ぶわ。」

「え。」

「俺はサクラでいいからね。」

サクラは人懐っこい顔で紅葉を頷かせました。

「同じクラスなのに変なの。全然お話したことなかったね。」

ふふっと笑う。

この明るい笑顔はなんでしょう？

誰とでも、楽しく過ごせる子なんだ。

このサクラが、クラスで目立つ理由を肌で感じました。

人気のある子の持つオーラみたいなものが溢れています。

綺麗な顔がメロンパンをかぶりつく姿。

かわいらしくて、見つめてしまいます。

自分がクールだって自覚もない。

ゆるそうな隙だらけの自然体。

なんだか傍に居てもものすごく心地いい。

紅葉は、サクラの笑顔に惹かれていました。

2話・メロンパンの零れる仕草（後書き）

綺麗な男の子が好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9062a/>

麒麟のゆびわ。

2010年10月13日12時51分発行